議長　副議長　局長　GL　係　回覧

様式第１号

令和２年　１月　１７日

真庭市議会
議長　古南　源二　殿

真庭市議会議員　緒形　尚　印

調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

１　区　　分　　調査研究　~~研修会~~　~~要請・陳情活動~~

２　訪　問　先

① 長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢470-3（軽井沢観光協会）
② 長野県飯田市大久保町2534（飯田市役所）

３　内　　容

視察目的

① 軽井沢観光協会・1月26日(日) PM2時～視察
街並み（歩道・自転車道・店舗・施設表示の色彩・トイレ等）
文化施設（田崎美術館・千住博美術館等）

② 飯田市役所・1月27日(月) PM~~2時~~ 1時～
牧野市長との意見交換、高校における地元学習教育等々

４　行　　程　　別紙のとおり

５　事務局から訪問先への依頼　　必要　・　~~不要~~

（注）複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること

真庭市議会 受付 '20.1.17 18

◆ 参加議員

・福島 一則　・氏平 篤正　・緒形 尚

◆ 行 程

1月26日(日)

	真庭市役所	
5:30		車(乗り合わせ)
	落合IC(中国道・岡山道・山陽道)	
5:40		距離 63km、所要時間 45分
6:25	岡山IC	
6:25		距離 6km、所要時間 15分
6:40	岡山駅西口パーキング	
		徒歩
	岡山駅	
7:02		東海道・山陽新幹線　のぞみ110号 東京行
8:42	名古屋駅	
9:00		JR しなの5号
11:59	長野駅	
12:27		北陸新幹線　あさま616号
12:58	軽井沢駅	
		タクシー
	軽井沢観光振興センター	
14:00		●研修 14時～16時(軽井沢観光協会・工藤局長) 「観光振興の取り組みについて」 ・街並みの景観整備 ・美術館を活かした観光 ・現地視察
17:30	軽井沢駅	
18:09		北陸新幹線　あさま621号
18:40	長野駅	
18:45		徒歩
18:50	ホテルJALシティ長野	
		長野県長野市鶴賀問御所町1221 TEL:026－225－1131

◆ 行 程

1月27日(月)

8:30 ホテルJALシティ長野

↓ 徒歩

長野駅(バス)

8:43

↓ 高速バス 飯田商工会館行き 28駅

11:47

飯田駅

12:37

↓ 徒歩(600m)

12:45

飯田市公民館

13:00

●研修 13時～15時30分
「高校における地元学習教育等」

15:30

飯田市役所

16:00

●研修 16時～17時
牧野市長と意見交換

●交流会 18時～20時
牧野市長と交流会

20:00

シルクホテル

長野県飯田市錦町1-10
TEL:0265－23－8383

◆ 行 程

1月28日(火)

シルクホテル

9:00 ●市内視察(秘書室長案内)
・天龍峡大橋(遊歩道「そらさんぽ天龍峡」観光名所)
・エス・バード(航空宇宙産業をはじめとした産業振興、人材育成の拠点)
・飯田美術館(菱田春草)

12:40

伊賀良(バス)

12:49

高速バス　名鉄バスセンター行き　4駅

14:35

名鉄バスセンター

徒歩　160m

14:37

名古屋駅

15:13

東海道・山陽新幹線　のぞみ37号 博多行

16:50

岡山駅

徒歩

岡山駅西口パーキング

17:10

距離　6km、所要時間　15分

17:25

岡山IC

17:25

距離 63km、所要時間 45分

18:10

落合IC

18:10

距離 5.9km、所要時間 12分

18:22

真庭市役所

議長　副議長　局長　GL　係　回覧

報　告　書

令和２年　３月　２３日

報告者　議員氏名　緒　形　　尚

下記のとおり政務調査費を使用して　研究研修　・（先進地調査）をしましたので、その結果を報告いたします。

１　日　時	自　令和２年　１月２６日（午前・午後）　６時００分 至　令和２年　１月２８日（午前・午後）　７時３０分
２　場　所	①長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢470－３（軽井沢観光振興センター） ②長野県飯田市大久保町2534（飯田市役所）
３　用　件	①軽井沢の観光振興について（街並み・文化施設・観光地の視察） ②産業振興と人材育成の拠点について（エス・バード視察） 地域力による未来をひらく心豊かな人づくり（高校生の地元学習教育） 牧野飯田市長と意見交換
４　概　要	詳細は別紙にて報告 ・軽井沢観光協会：工藤事務局長 ・飯田市：牧野市長、串原市長公室長、寺田産業経済部参事、秦野公民館副館長 氏原学習支援係長、北澤危機管理室長 ・参加議員：福島一則、氏平篤正、緒形 尚

飯田市議会 事務局 受付 '20.3.26 第 18 号

● 長野県軽井沢町視察

“避暑地軽井沢の誕生から現在の軽井沢”

避暑地としての軽井沢のスタートは、1886年（明治19年）カナダ生まれの英国聖公会宣教師 A.C.ショーが当地を訪れ、そのうち美しい清澄な自然と気候に感激し、家族・友人たちにそのすばらしさを推奨、その夏この地へ避暑に訪れたのが最初だと言われている。

明治21年には旧軽井沢の大塚山に簡単な別荘を建て、内外の知名人に軽井沢が保健と勉学の敵地として紹介したため、A.Cショー師とその友人たちである宣教師の別荘が年を追ってたち始めました。そして明治26年には初めて日本人所有の別荘も建てられました。

避暑地として新しい生命を与えられた軽井沢は、同年開通した碓氷新鉄道によって更にその発展の速度を速めていった。

また、避暑地軽井沢の揺籃期は外国人宣教師やその家族が大半であり、必然的にキリスト教的風潮の強い町であったようです。

そんなところから彼らは、軽井沢を永遠に明るく清潔で住みよい町にしようと心掛け、自ら率先し、住民たちにも「時間と約束を守ること、うそを言わぬこと、生活を簡素にすること･･･」など呼びかけこれを励行しました。

これらの実践により「善良な風俗を守り、清潔な環境を築こう」という高潔な精神が避暑地軽井沢の輝かしい伝統と歴史を貫く「軽井沢憲章」の根底となり、その後の幾多の困難を克服して得た礎であることは云うまでもないです。

一方、これらのパイオニアたちは軽井沢を単なる国際的な避暑地として発展させる基礎を築いただけではなく、地元の農家の人たちに、清澄な土地に合った高原野菜（キャベツ・白菜）の栽培法を教え、いままでヒエ、アワなどの雑穀類生産の細々ながらの農業から今日ある高原野菜への転換にも大きく貢献しました。年を追うごとに生産出荷高は増大し、現在では軽井沢の農業を支える主柱となっています。

避暑地としての軽井沢は、年々順調な歩みを続けその名声が広く知られるようになると、訪れる人々の数も増加を重ね明治30年ころにはその受入れのために貸別荘やホテルが営業を始めました。更に大正の初期には箱根土地（現在の(株)プリンスホテル）・鹿島建設・野沢組などの大手資本の参入によって土地分譲がはじまり、いままで旧軽井沢中心であった別荘地が南へ西へと開発された。また、日本人有産階級の人たちが盛んに訪れるようになって、日本人避暑客が外国人を上回るようになった。このため、避暑地軽井沢の様相は外国人先駆者たちが作り上げてきた質素で高潔な避暑地から日本人的な華やかな別荘地へと一変し、日本人避暑地客の需要を満たすために各種の商店が建ち並び、軽井沢の中心である旧軽井沢商店街は“軽井沢銀座”と呼ばれるほどの活況を帯びてきた。また、ゴルフ場、テニスコート、乗馬等のスポーツ施設も相次いで新設され避暑地としての機能もほぼ現在の原型として出来上がった。

このような著しい変容の内にも軽井沢憲章の精神を守り貫いていこうという動きが強固になり、軽井沢をこの世の聖地にしようという目的から「軽井沢避暑団」が結成され、その目的に沿った各種の啓蒙や諸活動が展開された。

夏の避暑地から、更に冬期の観光客を誘致しようと昭和 27 年に町内 5 ヶ所にスケートリンクを新設し、続いて私設のリンクが各所に造成整備され、銀盤号スケート列車、スケート専用バスなどが運転され冬期の観光の脚光を浴び、世界スピードスケート選手権を始め、全日本、国体スケートなどが開催され、昭和 38 年には 50 万人ほどのスケーターや観光客が訪れスケート全盛時代を迎えた。避暑地としての性格を持ち続ける反面、スポーツの町としての性格を帯び、加えて文学的要素を加味したところの、雲場池、白糸の滝、塩沢湖などの周辺の観光資源の整備や道路整備などが順次充実されていった。

現在の軽井沢は、「緑と太陽とおいしい空気の軽井沢」、「さわやか軽井沢」をキャッチフレーズに、夏の軽井沢から四季を通じての「保健休養地」として、環境整備、文化施設、スポーツ施設の整備充実そして観光行事等により誘客を図っている。平成 10 年 2 月長野冬季オリンピックでは、カーリング競技会が軽井沢で開催され、昭和 39 年の東京オリンピック総合馬術競技開催に続いて夏・冬 2 度のオリンピック会場となった。

また、大正末期から著名な作家、詩人、画家など文化人の来訪も多いことから、それら人々のゆかりの地や文学碑なども町内に広く点在し、文学散歩に訪れる観光客も多くなっている。更に、軽井沢で結婚式挙げるなど自然に親しもうとする人々や海外からの観光客も多く訪れるようになった。

完全週休二日制の普及に伴って、週末は軽井沢で静養する別荘客も年を追うごとに増えており、平成 5 年に「上信越自動車道」が開通し、平成 9 年 10 月に開業した「長野（北陸）新幹線」などの高速交通網が整備され、首都圏へのアクセスが身近になったため軽井沢を居住地とする方々も増えてきた。平成 27 年 3 月には「北陸新幹線」として金沢まで延伸となり、北陸方面からのアクセスがより身近になり多くの観光客が訪れている。

平成 28 年 4 月には、軽井沢町農産物等直売施設「軽井沢発地市庭（かるいざわほっちいちば）」が軽井沢南地区にオープンし軽井沢の食の素晴らしさを感じる場所ができた。

平成 28 年 9 月には、G7 交通大臣会合が開催され、令和元年 6 月には日本で初めての開催となる G20 サミットのうち持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合が開催された（真庭のシシも軽井沢で展示された）関係閣僚会合は、各国から参加する大臣クラスが 50 人以上、全体の参加者は 1,000 人を超える関係者が集まり、かってない大規模な国際会議の受入となった。リゾート会議都市の推進を通して、世界各国のみなさまに軽井沢の魅力を発信できたそうです。

保健休養地として、来訪者の通年化が進む軽井沢であるが、軽井沢の新しい将来像として「高原保養都市」を基調とし、都市、建築、交通、食文化、美術、工芸、スポーツの充実等、類い稀な歴史や文化などの地域特性を最大限に活かした「風土自治」のまちとして、明るく澄んだ和的叙情性を持った軽井沢モダンのまちづくりを目指していく。

● 意見交換

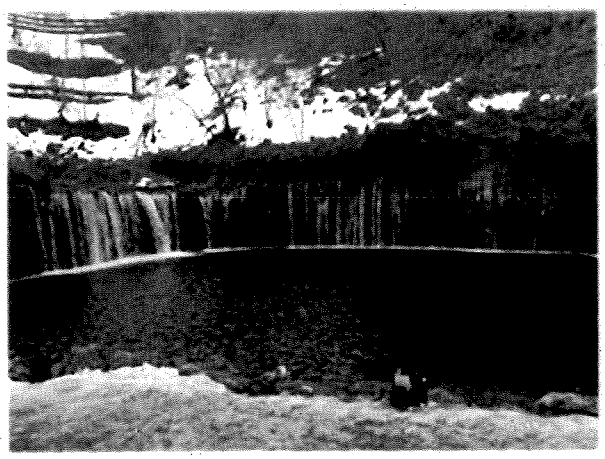
・観光客の推移は、昭和 45 年は 442 万人で、平成になり 850 万人を超え、現在では 871 万人となっている。
・インバウンド宿泊者は、約 20 万 4 千人の方が来られている。
・人口は約 2 万人であり、新幹線開業により東京からの移住もしくは通勤の方が増えた。
・フレックス定期券で通勤されている方が約 450 人（定期券、約 13 万円）約 1,000 人の方が東京⇔軽井沢を行き来している。
・観光立町として成り立っている。観光協会員は約 500 人強で、商工会員も増えている。
・別荘、一般、商売と 3 つに分けて住ます（都市計画）そのおかげで、30 年経っても自然が守られている。都市計画をかたくなに守ってきたことが今に繋がっている。
・富裕層の方は不自由さを求める（不自由さを失わないでと言われた）
・景観は町に任せて、商売人は人の繋がりを大切にする。
・下水道整備は、集中しているところだけ整備をする。
・別荘地は除雪もしない（来るときは覚悟してきてもらう）
・深夜における静穏の保持のため、営業や作業を行うことを「軽井沢の善良なる風俗を維持するための要綱」で決めている（午後 11 時から翌日午前 6 時までは営業や作業はできない）

意見交換後、工藤事務局長に軽井沢を案内していただく

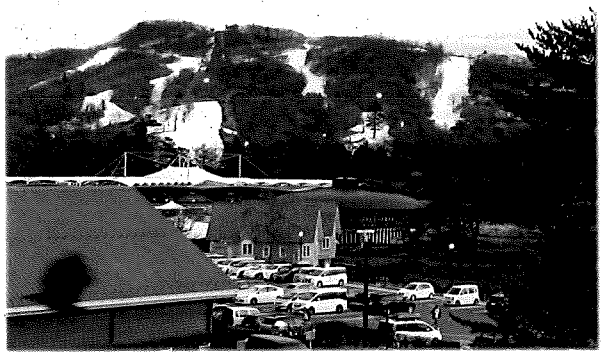
軽井沢発地市庭

スケート場

カーリング場



白糸の滝



駅前に軽井沢プリンスホテルスキー場

● 長野県飯田市視察

“地域力による未来をひらく心豊かな人づくり”

「地域人教育」は、平成23年度末に飯田市、松本大学、飯田OIDE黒姫高等学校の三者間で「飯田長姫高等学校地域人教育推進に係るパートナーシップ連携協定」を締結し始まりました。平成25年度に飯田工業高等学校と飯田長姫高等学校の再編統合により本校が開校し、この教育資産を継承しての取り組みとなっています。

「地域人」とは、「地球を『愛』し、地域を『理解』して、地域に『貢献』する人財（たから)」と定義している。高校と松本大学、飯田市が相互の教育方針や人材育成方針を尊重しながら協働し、相互により高い成果をあげられること、10 年後を見据えて、住みやすく暮らしやすい地域のあり方を創造できる人材育成を図ることを目指している。

また、県の「学びと働きを連携させた信州創生のための新たな人材育成モデル事業」により、飯田観光協会の吉原事務局長に地域人教育に関する事業のコーディネーターをお願いし、「地域人教育推進委員会」を設置して飯田市公民館、松本大学、関係の企業等との連携による推進力を強化しました。

長野県では、「夢に挑戦する学び」実施方針が策定され生徒の学びと教職員の教え方に関して改革が推進されている。県の「高校改革モデル校」としてこの地域人教育をこれからの教育活動の大きな柱の一つとして、より系統的かつ専門的に、さらには工業科にも学科に適した形態で導入しようと計画しています。それに加えて「環境」と「地域資源」「ビジネス」を全学科の共通テーマとして学科間連携を推進し、専門性の深化をより骨太の内容にしていく。これらの活動をカリキュラムとして系統的にまとめ上げ、地域に未来の新しい付加価値を創造できる「地域協創スペシャリスト」の養成を目指し、そのための研究開発プログラムを、文部科学省の「地域と協働による高校教育改革推進事業」に申請し、地域の総合技術高校として更なる進化に向けて取り組むと言われました。

当初、進学校の普通科高校にどうやって地域人教育を取り組んでもらうか？　手探り状況で模索していたが、地域人教育を積み重ねることで力がつき、その力を地域で活かしたいという高校生が出てきたそうで、はじめは相当苦労があったことをお聴きしました。

高校生からは、飯田は私たちのやりたいことを地域の人が応援してくれる場所、自分のやりたいことが実現できる場所なんだと感じた。はじめは面倒くさい授業だと思っていました。でも、地域の人たちにお世話になるうちに自分たちにもできることがないかを考えるようになった等々、成果発表会後の生徒の声を伺いました。

● 牧野飯田市長・意見交換（飯田市役所市長室）

令和２年度の市政経営の方針を、牧野市長から伺った。市長は、今年の私の思いを漢字一文字で示すと「結」になります。昨年ラグビーワールドカップで用いられた「ONE TEAM」にも通じる一字と捉えていますが、「良いだの結の力で結果を出す」ということです。これは、2020 年度が「いいだ未来デザイン 2028」で定めた前期４年の最後の年度に当たり、今年が私の４期目最後の年でもあることがベースになっています。
「いいだ未来デザイン 2028」の中期に向けた方向性を出し、また、飯田市の第 2 期地方創生総合戦略の策定にも取り組む必要があります。さらにリニア本体工事の進捗に合わせ、座光寺 SIC 関連の工事や代替地の確保、発生土対策も着実に進めていく必要があります。併せて、駅周辺整備事業の実施計画を本格化していかなければなりません。
そうした中で、市長は今一度、市長就任当初に掲げた「人と人、心と心を結ぶ水引型市政経営」に立ち帰りたいと考えています。人口減少など右肩下がりの時代にあっても、リニア、三遠南信自動車道時代を見据えた地域づくり、産業づくり、人づくりを着実に進めていくため「誰でも地域に帰れば一住民」という自覚を持ち、市民の皆さんとの結びつきを大事に取り組むと話されました。

キャッチフレーズは、「リニアがもたらす大交流時代に『くらし豊かなまち』をデザインする　～合言葉はムトス 誰もが主役 飯田未来舞台～」

意見交換では、天龍峡大橋が昨年 11 月に開通したが、開通にたどり着くまでの苦労話、橋自体は美しいシルエットと周辺景観になじむ「山鳩色」を採用したことやその下部に歩廊「そらさんぽ天龍峡」が設置できたことなど、大変な苦労があったことを伺った。
また、飯田水引は飯田地方に伝え続けられてきた伝統工芸であり、水引の全国生産量の 70％を占めていることを聞いた後、昨年、軽井沢町で初めての開催となる G20 サミットのうち持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合が開催された際に、閣僚が飯田市の水引を胸に付けて会議に出席されたことも伺った。閣僚が付けた水引を私たちにもお土産としていただいた。
牧野市長は、「まち・ひと・しごと創生本部」の KPI 評価チームの委員として国の地方創生の検証に携わったことで、真庭市・太田市長とも懇意にしていることを伺いました。改めて人の繋がりの大切さを再確認しました。
意見交換後、議場の見学をした。

● 長野県・南信州「産業振興と人材育成の拠点」S-BIRD エス・バード視察

エス・バードとは、当地域の産業振興と人材育成を図るための一大拠点です。施設には航空機産業や食品産業など地域の多様な産業の支援機関や、地域の皆さんのビジネスや学習、憩いの場が一体となっています。名前の由来は、「S」は南（South)、信州（Shinshu)、「B」は躍進（Breakthrough)、「I」は革新（Innovation)、「R」と「D」は研究開発（Research & Development）のイニシャルから、また同施設が航空機産業に取り組んでいること、当地域の技術や人材が世界で飛躍してほしいとの願いも込めて名付けられています。

場所としては、統合により使われていなかったリニア駅予定地の近くの工業高校の空き校舎を改修し、試験所や 500 名規模のホールがある A 棟、市の工業課や県・地域の産業支援機関、インキュベート企業が入る B 棟、航空機システムを研究する信州大学大学院やコワーキング空間の入る C 棟、食品系の試験機器が揃う E 棟からなっています。

航空機を構成する部品は機体の大きさにもよりますが約 300 万点と言われ、自動車の 3 万点と比較しても規模の違いが分かると思います。航空機は、機体、エンジン、それ以外の 3 要素で構成されますが、飯田ではこの「それ以外」に当たる航空機システム、「装備品」に特に重点を置いています。例えば離着陸時に出し入れされるランディングギアや、コックピット等の通信装置、客室の内装から照明、座席シートなどはすべて装備品に該当します。そして日本ではこの装備品市場が未だ成長の余地を秘めています。航空機 1 機当たりの価格構成比は、機体・エンジン・装備品で各 3 割前後ずつ、アメリカの航空機産業市場全体でも、機体・エンジン・装備品が各 3 割です。一方で日本の市場規模は、機体 6 割、エンジン 3 割、装備品 0.5 割となっており、装備品という日本が得意とする分野でも未だ成熟していないと言われています。

世界の先端産業が盛んな都市では、大学と公設試験所が一体となり、人材育成から研究開発、実証試験までを一貫して行える体制が整っており、その周辺には企業が集積していたことから、エス・バードではこれをヒントに、(1) 高度人材育成・供給機能、(2) 研究開発機能、(3) 実証試験機能をエス・バードに集約しています。

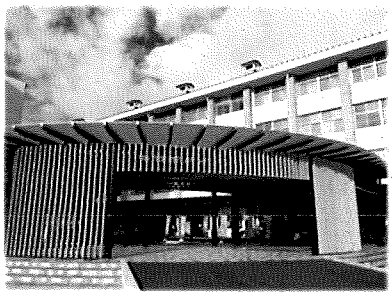
まず (1) 高度人材育成・供給機能、(2) 研究開発機能については信州大学にお願いし、2017 年度より航空機に関する工学系修士課程の寄附講座を開講しています。高等教育機関は当地域の悲願であったことから、地域の産官学金の機関がコンソーシアムを形成し、講座の運営費や教授の人件費を寄附、キャンパスとしてはエス・バードを活用し、また長野市の工学部を卒業して引っ越してくる学生に対しては、地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）を活用し、南信州の 14 市町村が連携して地域内外の企業から寄附を募り、引越費や学費を支援しています。本講座では、宇宙航空研究開発機構（JAXA）や航空機産業に取り組む地元企業から招聘した教授が「装備品認証特論」等の特徴的かつ実践的なカリキュラムを提供し、2 年間この飯田の地で学べば、修士号を取得できることになっています。2019 年春の初の卒業生は、大手重工業企業の航空機部門に就職するなど、一歩ずつ成果が出始めているところです。

実証試験に関しては、エス・バードに入居する産業支援機関の公益法人が担っています。航空機はマイナス 40℃の上空 1 万 m や赤道直下の 50℃の砂漠、時には乱気流や雷雲など過

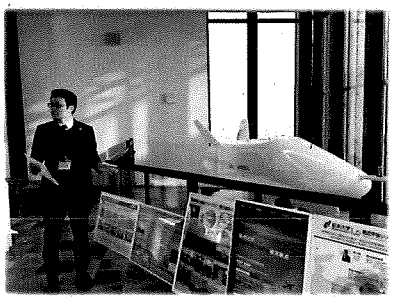
酷な環境を飛ぶことから、搭載する装備品には国際的な安全試験が必要です。しかし設備がないことから、国内の企業は試験の大半を海外で実施している状況です。そこで、国内で航空機産業を振興したい経産省や JAXA、産業界の後押しも受け、航空機産業に不可欠で日本でここにしかない着氷試験機器や防爆試験機器等を、内閣府の地方創生交付金等を活用しながらこれまでに 3 台整備し、計 5 台整備予定です。

これから成長する航空機産業において、日本で唯一試験ができるのが飯田となれば、全国からこの地への試験での来訪、企業等の集積が期待されるところです。

飯田市公民館にて



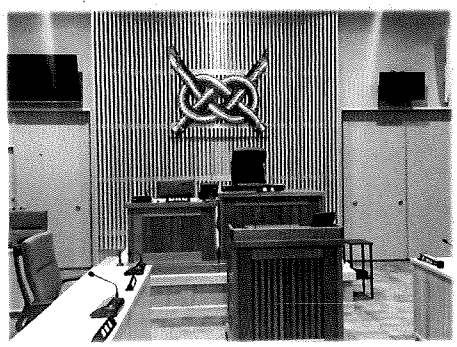
エス・バード視察



寺田参事より説明

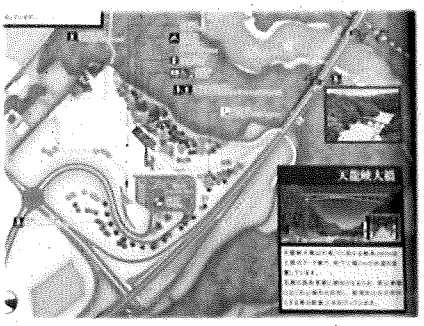
航空機シミュレーション装置

航空機システム部門



飯田市議場

※ 災害時、避難所になる（議場内の備品は全て移動式で、床はフラットである）



天龍峡大橋周辺地図

そらさんぽ天龍峡